

● 中 部

水 野 みか子

愛知県芸術劇場、電気文化会館、しらかわホールなど主要ホールが、たてつけに改装工事期間に入っていたが、それらも生まれ変わった音響で再稼働され秋からは賑やかさが戻っている。生まれ変わった音響環境で愛知県芸術劇場小ホールが「耳」を引いた代表的公演が、愛知県芸術劇場プロデュースオペラ『バステアンとバステイニス』(11/16,17)である。期待の新鋭角田鋼亮の指揮で、ソプラノの伊藤晴、柴田紗貴子、バス・バリトンの田中大揮、テノールの中井亮一、吉田進が爽やかな演技と歌唱で楽しませた。

今年も数は少ないながらオペラ新制作に実りがあった。愛知県芸術劇場と日本オペラ振興会の共同制作による『ナヴァラの娘』『道化師』では、笛田博昭や小山陽二郎ら名古屋出身の男性歌手陣が活躍(2/4)。名古屋二期会の名古屋ことばによる歌劇『ちゃんちき』(12/12,13)は日本特殊陶業市民会館で開催され、名古屋の文化力を印象づけた。名古屋ボストン美術館が20年の歴史の幕を閉じたのは残念だったが、芸術ジャンルを超えた新企画は別の場所にも受け継がれている。演劇、美術、音楽の総合拠点としての愛知芸術文化センターでは、多彩な企画がダンスを軸に展開され、加藤訓子+平山素子による『DOPE』(1/26-28)、ストミック(11/2-4)、サウンドパフォーマンス・プラットフォーム、劇場オルガニスト都築由理江のデビューなどジャンル横断型の公演が注目を集めている。2019年のトリエンナーレに向けて現代音楽への目配りによって啓蒙的企画も行われている。

オーケストラ界でも多彩な活動が展開された。名古屋フィルハーモニー交響楽団では、クーネやアッテルベリでシドニー特集を組んだ二月定期、マリンバの大茂絵里子を迎えて伊福部昭のコンチェルトを演奏した四月定期、ティエリー・フィッシャー渾身のメンデルスゾーン『真夏の夜の夢』全曲とデュティユーのチェロ協奏曲(独奏はニコロ・アルトシユテット)を取り上げた七月定期、小曾根真と川瀬賢太郎の痛快なバーンスタイン特集の九月定期などが印象に残った。定期と並行して行われたベートーヴェン・シリーズには、小泉裕、川瀬のほか鈴木秀美も登場し、十二月の第九で人気を集めた。セントラル愛知交響楽団は、コントラバスの大御所アレクサンドル・シーロがスワロフスキーとともに骨太のクーセヴィツキーを聞かせた一月定期、角田鋼亮がメジャーエワと端正な音楽を築いた四月定期、ずしりと重いブルックナーの四番を披露したマーク・マスト登場の六月定期、齋藤一郎が山本和智作品を携えてオケを炸裂させた十一月定期などが目立った。秋山和慶のリードで着実に実力を伸ばしている中部フィルハーモニー交響楽団は、地域密着型のプログラムと定期演奏会を巧みに組み合わせ、ファンを獲得している。今年の演奏会には、藤岡幸夫、山下一史の指揮のほかソリストとして辻彩奈、堤剛、毛利文香、北村朋幹、北村陽らも登場し賑やかになった。愛知室内オーケストラは新田ユリの指揮で興味深い北欧プログラムを継続的にとりあげている。

2017年の名古屋市民芸術奨励賞に選ばれた北住淳、2018年度名

古屋市民芸術祭賞を受賞したソプラノの相可佐代子、同じく特別賞の松波千津子など、ヴェテラン演奏家の活躍はますます顕彰されたが、一方で若手の活躍も目覚ましい。ピアノでは、佐々木仔利子、中沖玲子、高山三智子らヴェテランが若手を育てつつ自らも充実した活躍をしたほか、戸谷誠子(4/4)、山本多恵佳(5/12)、山川達史(9/8)、伊藤佳菜(10/7)、稲熊佐江子(10/13)、鶴殿里菜(10/28)、鈴木真貴子(11/10)、秀平雄二(11/26)、安藤玲奈(11/28)、中川朋子(12/21)らのリサイタルが目立った。音楽では神田詩朗(10/27)、田中彩子(10/14)、新実真琴(10/20)、太田亮子(10/25)、寺本久美子(10/26)、荻野砂和子(10/30)、森雅史(12/28)、盛かおる(12/24)らのリサイタルが注目された。愛知ロシア音楽研究会は、音楽学者の安原雅之や声楽の寛聰子を中心に充実した企画をいくつも打ち出している。弦楽器では愛知出身の竹澤恭子リサイタル(6/22)が人気を集めたが、ザ・ストリングス名古屋(9/3)、ヴェルテックス・ムーゼ(11/24)も手堅く活躍し、リサイタルでは宮田大(2/2)、島田真千子(3/3)、中丸まどか(2/15)、小泉悠(4/28)、林裕(10/4)、石田なをみ(10/18)、篠原悠那(10/22)、下島万乃(10/28)、石橋直子(11/19)、また平松晶子・中川さと子のデュオ(11/7)などが目立った。ユーフォニアムの小寺香奈は、シューマン、シェーンベルク、ブーランクに加えて、池田萌、椎葉ふう香、後藤成美、柴田誠太郎への委嘱作品を初演して強い印象を残した。クラリネットのつつみあつきによる多角的な企画、オーボエ奏者山本直人を中心とする名古屋ダブルリードアンサンブル、メビウスプラスクィンテット、サクスの佐藤功枝、水野雄太、また、宗川論理夫企画・作曲の「智恵子抄」、名フィルのレジデント・コンポーザー酒井健治制作の「日欧の万華鏡、ハナツ・ミロワールを迎えて」など音楽家たちのプロデュースも注目された。名古屋音楽ペンクラブ主宰「音環コンサート」には例年地域の実力派が集まるが、2018年度にはソプラノの渡部純子、バリトンの初鹿野剛、ピアノの伊藤仁美、原田綾子、山本敦子が出演した。

開館20周年を迎えた豊田市コンサートホールでは、能楽堂併設という特徴を生かして、シプリアン・カツァリスのリサイタル(9/30)やジュニア・オーケストラの演奏会からろうそく能(5/13)、中国古典芸能の崑劇(6/16)まで幅広い催しが、市民目線の近づきやすい企画で打ち出された。静岡AOIは「静岡の名手たち」やレジデンス・クワルテットの継続企画のほか、オルガンの500円コンサートや音楽館+科学館+美術館共同でストリンググラフィ・アンサンブルのイベント「糸の森の音楽会」(7/21)を主宰するなど、子供やファミリー向けの企画を巧みに取り入れている。